

<話し手>を指す「こちら」の2用法

金井勇人

【キーワード】 こちら、こっち、わたし、話し手、発信源

1. はじめに

指示語「こちら」は、一人称名詞「わたし」と同じく、話し手を指すことができる。

(1) 三浦：私ね、講演の時によく星野さんのことをお話しさせていただいています。それなのに、あんまりお手紙も差し上げないで、ごめんなさい。家ではいつも星野さんのお話をしたりしていますのにね。

星野：こちらこそ、本を贈っていただいているのに、お礼の手紙も出さないで……。 【銀色のあしあと】

この「こちら」は、話し手＝星野氏を指す。このような、「そちら」の存在（ここでは三浦氏）を前提とした「こちら」を、本稿では便宜的に「こちら(A)」と言うことにする。

しかし話し手を指す「こちら」には、それ以外の用法が存在する。それは、<話>の冒頭部において<発信源>を提示する「こちら」とでも言うべきものである。

(2) 「皆様、お早うございます。朝早い出勤ご苦労様です。こちらは××党の○○△△です。よろしくおねがいたします」
(選挙カーから)

(3) 「毎度おさわがせいたしております。こちらは毎度お馴染みのちり紙交換でございます。ご家庭で御不要になりました古新聞、古雑誌、ポロ布などございましたら、多少に関わらずちり紙とお取り替えいたしております」(路上で)

(4) こちらは、○○町役場です。ただいま、大きな地震がありました。○○地区の住民の皆さんは、津波の危険がありますので、直ちに××へ避難してください。(屋外放送)

(5) こちらは○○警察本部生活安全指導班です。私たちは、いろいろなお伺いして、実技などを交えてわかりやすく楽し

くをモットーに防犯指導を行う女性警察官のチームです。

(インターネットのサイト)

これらの「こちら」も、〈話し手〉を、あるいは〈話し手および話し手が所属する組織や団体など〉¹を指す。しかしこの(2)～(5)では、「そちら」の存在を前提としているとは言い難い。本稿では便宜的に、このような「こちら」を、「こちら(B)」と言うことにする。

以下では、この「こちら」の2用法をめぐって考察を進めていく。考察にあたっては、一人称名詞「わたし」および指示語「こっち」との対照を、積極的に行う。最終的に「こちら」の2用法を原理的に説明することができれば、本稿の目的は達されたことになる。

2. 「こちら(A)」をめぐって

先に、「こちら(A)」を、「そちら」が存在する場合の用法と定義した。それでは、「そちら」が存在するとは、いったいどのようなことだろうか。

- (6) (=1)三浦：私ね、講演の時によく星野さんのことをお話しさせていただいています。それなのに、あんまりお手紙も差し上げないで、ごめんなさい。家ではいつも星野さんのお話をしたりしていますのにね。

星野：こちらこそ、本を贈っていただいているのに、お礼の手紙も出さないで……。 【銀色のあしあと】

- (7) 散歩途中、小学高学年らしい子どもたちの「けんか」に遭遇した。…(中略)…「どうしたの?」。声を掛けると、腕組みしていた男児が「いいえ、何でもありません。ぼくたちのことです。どうぞ、お構いなく」その言葉と態度に驚き、立ち尽くしていると今度は「こちらの問題ですので、おばさんには関係ありません。立ち去ってください」

【毎日新聞】1999.02.21朝刊

- (8) 「しかし、日本最初の試みという冒険に、これまで伸びてきた会社を巻き込むのは心配でならない。万一失敗したら、とりかえしのつかないことになる。そんなにやりたいのならば、別会社を作って、きみ個人の事業としたらどうだろう。その必要資金をこちらから貸すという形式で……」

【人民は弱し 官吏は強し】

¹ 本稿における〈話し手〉は、〈話し手〉あるいは〈話し手および話し手が所属する組織や団体など〉を意味する、と定義する。

(6)では三浦氏が、(7)では「おばさん」が、(8)では「きみ」が、それぞれ「そちら」に相当するので、「こちら」の使用が可能となっている。

次の例では、聞き手に相当するものは、あえて言えば不特定多数の読者だが、この話し手（書き手）にとって、それは具体的な存在とは言えない。

(9) わたしの家の近くの道を、よく暴走族が通ります。とてもうるさくてめいわくです。…（中略）…人は何か行動する時に、相手の気持ちを考えてから行動にうつします。わたしはバイクだって同じだと思います。 『毎日新聞』1999.03.05 朝刊

このような場合には、「こちら」を使用することができない。

(9)' ? こちらはバイクだって同じだと思います。

ここから、「そちら」の内容は“具体的な聞き手（読み手）”でなければならぬと分かる。

しかしながら「そちら」とは、単なる聞き手のことでもない。次の例では、具体的な聞き手がいるのにもかかわらず、「こちら」の使用は不自然である。

(10) ゆらーり、ゆらーり、お母さんが生まれたばかりの赤ちゃんを抱っこしてあやしている。無心に眠る赤ちゃん。お母さんはそっと歌いだした。「アイ・ラブ・ユー いつまでも／アイ・ラブ・ユー どんときも／わたしが いきているかぎり／あなたは ずっと わたしのあかちゃん」。

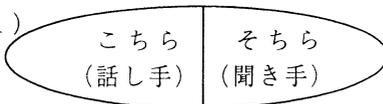
『毎日新聞』1999.12.24 朝刊

(10)' ? あなたは ずっと こちらのあかちゃん

「お母さん」は、明らかに「あかちゃん」に対して発信している。しかし、「お母さん」と「あかちゃん」との間に何らかの対立を認めることは、常識的な直感からも難しい。

つまり「そちら」とは、単なる具体的な聞き手のことではなく、話し手と何らかの理由（空間的、心理的、…）で対立する聞き手、ということである。その構造は、いわゆるコ対ソという対立図式によって説明されるだろう。

(図1)



(10)の「お母さん」と「あかちゃん」とは、(図1)のような対立図式ではなく、いわゆる融合型を構成するので、「こちら」が使用できない

のだと考えられる。²

以上から「こちら(A)」の使用条件は、次のように定義できるだろう。

★「こちら(A)」の使用条件

発話時点において、話し手が、ある特定の誰かに対して発信しているという意識を持ち、その相手との間に何らかの(空間的、心理的、…)対立が存在すること

この使用条件(A)を満たす場合の「こちら」が、本稿で言う「こちら(A)」である。

3. 「こちら(B)」をめぐって

前節で、「こちら(A)」の使用条件を導き出した。しかし、この使用条件(A)を満たさない「こちら」も観察される。それが、第1節で紹介した一連の「こちら(B)」である。

(2) こちらは××党の〇〇△△です。(選挙カーから)

(3) こちらは毎度お馴染みのちり紙交換でございます。(路上で)

(4) こちらは、〇〇町役場です。(屋外放送)

(5) こちらは〇〇警察本部生活安全指導班です。

(インターネットのサイト)

ここで注目したいのは、これらが<話>の冒頭部に現れているという事実である。つまりこれらの「こちら」は、<発信源>を提示する役割を果たしているのだと考えられる。

<話>が始まる以前には、そもそも<発信源>などは存在さえしない。<話>が始まるということは、何もないところにまず<発信源>が開設される、ということに等しい。

これらの「こちら」は、<話>の冒頭部において、それまで存在さえしなかった<発信源>の開設を宣言し、その身元を明らかにする、という機能を果たしているのである。すべて「こちらは…です/でございます」といった形態をとることに注目したい。

したがって、<話>の冒頭部において、次のように、直後に話し手の主張などを続けることはできない。

(11) ? こちらは当選の暁には税制改革を断行する覚悟で立候補いたしました。(演説の冒頭部で)

<発信源>の提示は、先に見たように「…です/でございます」によ

² 本稿では考察対象を対立型に絞る。対立型とは「相手と話し手との原始的な対立の様式」を言う(三上1972:177)。一方、融合型では、「相手と話し手とは「我々」としてぐるに」なる(三上1972:178)。ただし三上(1972)は対立型を「楕円の」、融合型を「円の」と述べている。

て行われる。したがって、＜主張＞は、発信源の提示になり得ないのである。

以上の議論から「こちら(B)」の使用条件は次のように定義できる。

★「こちら(B)」の使用条件

(潜在的な)聞き手にとって＜発信源＞が不特定であるため、
＜話＞の冒頭部において＜発信源＞を提示する必要があること
⇒ (主に「…です／でございます」といった形態をとる)

「こちら(B)」が、＜話し手および話し手が所属する組織や団体など＞を指すことが多いのは、語用上の制約と考えられる。

すなわち何もないところに＜発信源＞を開示し、不特定多数に何かを訴えようという動機は、一個人の抱くものではなく、何らかの組織や団体の抱くものであることが、圧倒的に多いからである。

意味論的な使用条件としては、上記の記述で十分だろう。

4. 「こちら」の特質

それにしても、同じ「こちら」が、(A) (B)という2つの用法を持つのは、なぜだろうか。以下では、「わたし」や「こっち」との対照などを通して、「こちら」の特質をさらに明らかにしていきたい。

4.1 「こちら」の二重構造

「こちら」は基本的に方向を表すので、その指示範囲は局所的ではなく、非局所的だと考えられる。具体的な場所を指す「こちら」を例に見てみる。

(12) 畑の隅にある物置から突き出している竹ざおの上に、ジョウビタキが止まって、こちらを見つめていた。

雨が激しく降り出したので「こっちへ来なさいな」と手を差し出してみた。こちらには来なかったものの、雨のかからない屋根の下に身を寄せた。人間と同じような仕草に思わず笑ってしまった。

『毎日新聞』1999.11.19 朝刊

この「こちら」は、「わたし(書き手)」とその周囲の領域を、その指示範囲に含む。つまり、この「こちら」は、その指示範囲について次のような二重構造を持つ。



また、例えば先の例における「こちら」は、次のように置き換えること

ができる。

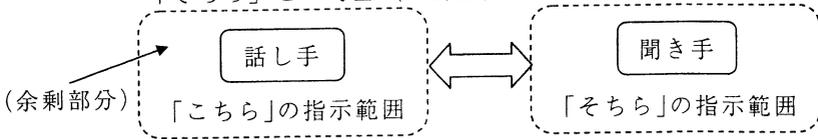
(6) 'わたしこそ、本を贈っていただいているのに、お礼の手紙も出さないで……。

(7) 'ぼくたちの問題ですので、おばさんには関係ありません。

(8) 'その必要資金を会社から貸すという形式で……

にもかかわらず (6)(7)(8)において話し手は、「わたし」「ぼくたち」「会社」などではなく、「こちら」を選択している。それは前節で見たように、聞き手との間に存在する何らかの対立関係を表すためである。以上の議論から、「こちら」の構造は、次のようになっていると考えられる。

(図3) 「こちら」の二重構造(余剰部分)と「そちら」との対立(⇔部分)



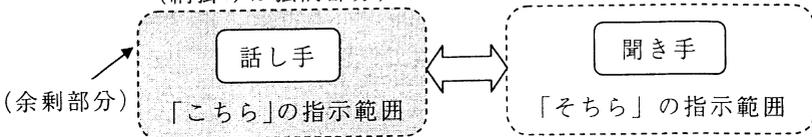
4.2 <余剰部分>に強調が置かれること

さて、この二重構造から「こちら(B)」を説明することができそうである。

<発信源>とは要するに、発信を行う場所(本稿では「場所」を広義に捉える)のことである。したがって、(2)(3)(4)(5)の「こちら(B)」は、場所を提示するという機能¹を担っている。

つまり話し手は、自身を場所化して表すのである。そのため、<話>の冒頭部の「こちら」においては、その<余剰部分>に強調が置かれると考えられる。

(図4) 「こちら(B)」が話し手を指すときの構造(網掛けは強調部分)



このとき、<余剰部分>に強調が置かれることによって、<対立関係>の重要性は二次的となる。そのため<話>の冒頭部では、「そちら」が存在しないときでも、言わば臨時的に「こちら」の使用が容認されるのだと考えられる。

(A)(B)という「こちら」の2用法を、(強調部分までを含めた)構造

面から、以上のように説明することができるだろう。

例えば(2)では、もともと<発信源>が特定されていないからこそ、「こちら(B)」が使用できる。これを、仮に次のような設定に変更すると、とたんに不自然となる。

(13) (壇上で。候補者本人による演説)

? こちらは××党の〇〇△△です。

このとき、すでに聞き手にとって<発信源>は特定されているので、話し手は<余剰部分>に強調を置いて自身を場所化する必要がない。そのような理由で、(13)は不自然になるのだと考えられる。

次のケースも、同様の理由で不自然である。

(14) 時間の五分前に行くと、ふたりはすでに到着していた。窓際の隅の席について、コーヒーを呑みながら私を待っていた。

「これ、うちのやつ」

内藤が少し照れたように紹介した。

「(φ) 裕見子です。初めまして」

【一瞬の夏】

(14) ? こちら、裕見子です。初めまして (話し手=裕見子)

この場合も<話>の冒頭部ではあるが、「こちら(B)」は使用できない。それは、聞き手である「私」が「裕見子」の目の前にいる(さらに紹介もされている)からである。<発信源>としての「裕見子」は、「私」にとって、すでに特定されている。

これらのケースから、<話>の冒頭部…という条件は、必要条件であって、十分条件ではない、ということが分かる。重要なのは、あくまでも(聞き手にとって)<発信源>が“特定されているか否か”であり、それが特定されていないときにのみ、「こちら(B)」が使用可能になるのである。³

4.3 「こっち」との対照

それでは、「こちら」と同じく方向を表す「こっち」は、<発信源>を提示する用法に適するだろうか。

(2)' ? こっちは××党の〇〇△△です。(選挙カーから)

(3)' ? こっちは毎度お馴染みのちり紙交換でございます。

(路上で)

(4)' ? こっちは、〇〇町役場です。(屋外放送)

³ 「特定」という概念は、ある意味で曖昧である。例えば、顔は分かっているが身元が分からないときを、特定と呼ぶか不特定と呼ぶか、など。しかし本稿では、「主観的な判断による」とのみ考えることにする。本稿の議論には、それで十分だと思われる。

(5)' ? こっちは〇〇警察本部生活安全指導班です。

(インターネットのサイト)

まずは、具体的な場所を指すケースを例に、「こちら(A)」と「こっち」の使用状況を見てみたい。

(15)(=12)雨が激しく降り出したので「こっちへ来なさいな」と手を差し出してみた。こちらには来なかったものの、雨のかからない屋根の下に身を寄せた。

この「こっち」と「こちら」とは、入れ替えが可能である。

(15)' 雨が激しく降り出したので「こちらへ来なさいな」と手を差し出してみた。こっちには来なかったものの、雨のかからない屋根の下に身を寄せた。

ここから分かるように、両者は同じく方向を指すのであり、聞き手との対立を前提とすること、その指示範囲が二重構造的であることにおいて、同様の性質を有する。



しかしながら、その使用の適否には差が見られる。まず、(6)(7)(8)の「こちら」は「こっち」と入れ替えることが可能である。

(6)「こっちこそ、本を贈っていただいているのに、お礼の手紙も出さないで…

(7)「こっちの問題ですので、おばさんには関係ありません。

(8)「その必要資金をこっちから貸すという形式で……

しかしながら、次のようなケースでは入れ替えが成功しない。

(16)彼は受話器を取り上げると、

「L社の京都支局ですね。こちらは左山です。これから記事をおくります」

と、はっきりした口調で言った。 『あすなる物語』

(17) ? 「L社の京都支局ですね。こちらは左山です。これから記事をおくります」

(17)の「こっち」は、やや不自然に感じられる⁴。そこで「こっち」が自然に使用できるように変更を加えたのが、次である。

⁴ 文体的なぞんざいさも「こっち」には伺えるが、それが「こっち」の使用を妨げるのは非常に改まった場面においてだろう。(本稿で扱うような)適度に改まった場面では、あまり問題とならないと思われる。

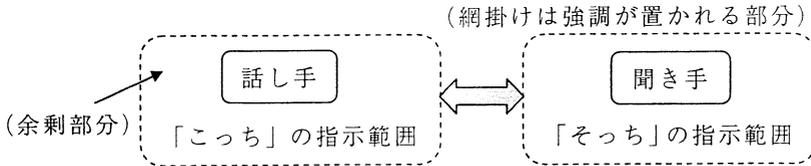
(18)「京都支局も忙しそうですね。こっちも忙しいですよ」
それでは(17)と(18)との違いは何だろうか。

(17)では、「京都支局ですね」と確認していることから分かるように、その会話は、まだ冒頭部である。このような時点での話し手は、聞き手にとって、まだ十分に特定し得るような存在とは言えない。

一方、(18)のように、「京都支局も忙しそうですね」というコメントを前に置けば、その会話は、開始後ある程度の時間が経っていることになる。この時点での話し手は、聞き手にとって、すでに十分に特定し得る存在になっていると言える。

先に見たように、「こちら」と「こっち」の構造は同様と考えられる。しかし(17)(18)の差異から推察されるのは、「こっち」においては、その<対立関係>に強調が置かれる、ということである。

(図6)「こっち」が話し手を指すときの構造



このように考えてはじめて、(17)(18)の差異が説明できるだろう。

(17)の「こっち」が不自然なのは、会話が開始した直後で、聞き手にとって、話し手が十分に特定されていないため、<対立関係>に強調を置きにくいからである。

(18)の「こっち」が自然なのは、すでに会話が進行していて、聞き手にとって、話し手が十分に特定されているため、<対立関係>に強調を置きやすいからである。

以上の議論から、「こっち」の使用には、聞き手にとって<発信源>が特定されていることが前提となる、ということが分かる。

<話>の冒頭部において、(潜在的な聞き手にとって)<発信源>が特定されていない場合、そのような段階で「こっち」を使用することはできない。そのような理由で(2)'(3)'(4)'(5)'は、すべて不自然となるのである。⁵

以上、「こっち」が、「こちら(B)」に相当する用法を持たないことについて、検証した。

4.4 「わたし」との対照

⁵ その<話>が開始する以前から存在していた<対立関係>が再開する、という可能性はあるだろうが、そのような例外は考察の範囲外とする。

それでは「わたし」は、＜発信源＞を提示する用法を持つだろうか。

(2)”？ わたしは××党の○○△△です。(選挙カーから)⁶

(3)”？ わたしは毎度お馴染みのちり紙交換でございます。

(路上で)

(4)”？ わたしたちは、○○町役場です。(屋外放送)

(5)”？ わたしたちは○○警察本部生活安全指導班です。

(インターネットのサイト)

「わたし」と「こちら」の使用状況で、決定的に異なる点は、その指示範囲における二重構造性の有無である。

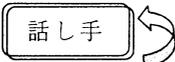
(19)(=12) 雨が激しく降り出したので「こっちへ来なさいな」と手を差し出してみた。こちらには来なかったものの、雨のかからない屋根の下に身を寄せた。人間と同じような仕草に思わず笑ってしまった。

(19)’？ わたしには来なかったものの、…

通常「わたしに来る」とは言えず、「～のところ」や「～のほう」などの場所化・方向化の接辞を付加しなければならない。

(19)” わたしのところには来なかったものの、…

つまり「わたし」は、その指示範囲において、「こちら」のような二重構造を有しないということである。

(図7) 

「わたし」の指示範囲(重なる)

4.2 で見たように、＜発信源＞を提示するときの「こちら」は、場所化の機能を果たす。それは、「こちら」の“二重構造”における、“余剰部分”を強調してのものであった。

しかし(図7)に見るように、「わたし」は“二重構造”を有しないので、場所化に貢献し得ない。したがって、「わたし」は＜発信源＞を提示する用法に適さず、(2)”～(5)”も不自然な文となるのである。

5. まとめ

本稿では「こちら」の2用法をめぐって考察を行った。

(A) 聞き手との対立を表す

発話時点において、話し手が、ある特定の誰かに対して発信し

⁶ この場合、選挙カーは常に走り回っていると仮定する。したがってこの発話の(街のあちこちに点在する潜在的な)聞き手にとっては、話し手である「わたし」を特定するのは困難である。

ているという意識を持ち、その相手との間に何らかの（空間的、心理的、…）対立が存在すること

(B) <話>の冒頭部において<発信源>を提示する

（潜在的な）聞き手にとって<発信源>が不特定であるため、<話>の冒頭部において<発信源>を提示する必要があること

「こっち」は「こちら(B)」に相当する用法を持たない。「こっち」の使用においては、「そっち」との<対立>に強調が置かれるが、聞き手が不特定であれば、そのような<対立>も存在しないからである。

「わたし」も「こちら(B)」に相当する用法を持たない。「わたし」の指示範囲は、「こちら」のような“二重構造”ではない。<話>の冒頭部では場所化が必要となるが、そのためには二重構造（余剰部分）が必要となるからである。

（かないはやと／文学研究科博士後期課程4年）

参考文献

- 金井勇人「失礼さという観点から見た二人称指示の体系」『早稲田大学大学院文学研究科紀要』48, 2002, 早稲田大学大学院
- 金水敏 1990「方向と選択～コチラ類の指示詞～」『日本語学』9, 22-30, 明治書院
- 近藤泰弘 2000『日本語記述文法の理論』ひつじ書房
- 瀬戸賢一 1997「意味のレトリック」『文化と発想とレトリック』94-177, 研究社
- 田窪行則 1997「日本語の人称表現」『視点と言語行動』14-44, くろしお出版
- 多門靖容 2002「比喩分析の新展開～換喩・提喩を中心に～」第39回表現学会（桜花学園大学 2002.6.1）シンポジウム資料
- 三上章 1972『現代語法新説』くろしお出版（復刊第一刷，初出 1955 刀江書院）
- 山梨正明 2000『認知言語学原理』くろしお出版
- Levinson, S.C. 1983 *Pragmatics* Cambridge University Press

引用資料

- 井上靖『あすなろ物語』新潮文庫
- 沢木耕太郎『一瞬の夏』新潮文庫
- 星新一『人民は弱し 官吏は強し』新潮文庫
- 三浦綾子・星野富弘『銀色のあしあと』講談社文庫
- 吉行淳之介『砂の上の植物群』新潮文庫
- 『毎日新聞』（1999年版 CD-ROM）